

# “imago”としての“dominus”

— トマス・アクィナスにおける“imago”の表現 —

佐々木 亘

The Human Master as the Image of God

— On the Representation of “imago” in Thomas Aquinas —

Wataru Sasaki

---

トマス・アクィナスによると、人間は何よりも神の“imago”（似姿）として位置づけられる。人間が自らのほたらきの“dominus”（主）であるという規定も、“imago”から必然的な仕方  
で導き出されている。しかるに、“imago”とは、もともと絵画や彫像における誰かの似姿を  
意味している。すなわち、範型である何かを表現するものが“imago”にほかならない。では、  
人間はいかなる理由から神に対する“imago”とされるのであろうか。そもそも、人間において、  
範型である神はどのような仕方  
で表現されているのであろうか。

**Key Words:** [“imago”の表現] [範型への運動] [聖なる教え] [至福] [痕跡の表現]

(Received September 24, 2012)

## 序

トマスにおいて、人間が神の“imago”（似姿）であるということが、彼の人間理解にお  
ける起点であると言えよう<sup>(1)</sup>。この点は、主著である『神学大全 (*Summa Theologiae*)』の構造  
そのものから、明瞭に解することができる。この著は三部から構成されており、トマスは第一  
部第二問題の序で、『神学大全』全体の内容と構成に関して、次のように述べている。

この「聖なる教え (*sacra doctrina*)」の根源的な意図は、神に関する認識を伝えることであり、  
それは、先に述べられたことから明らかなように、たんにご自身においてあるかぎりだけで  
はなく、諸事物の、特に理性的被造物の「根源 (*principium*)」であり、その「究極 (*finis*)」  
であるかぎりの、神に関する認識を伝えることである。それゆえ、この教えの開示を目指して、  
われわれは、第一に「神」について、第二に「理性的被造物の神への運動 (*motus*)」について、  
第三に、「人間であるかぎり、われわれにとって神へと向かう道 (*via*)」である、「キリスト」

---

\* 鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻現代ビジネスコース (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

について、論ずることになるであろう<sup>(2)</sup>。

『神学大全』は、その名が示すように、「神学」に関する著作である。それは、「聖なる教え」という、神からの啓示にもとづく「学」に関する体系にほかならない。したがって、『神学大全』そのものは、「神の認識を伝えること」を根元的な目的としている。

しかしながら、この場合の「神学」や「神の認識」を、哲学や社会科学とは無関係で、それらの領域のそとにあるものとして解することは、間違っていると言えよう。たとえば、第一部第七五問題から第八九問題では、認識論などの哲学的考察にもとづいて、人間の本性に関する議論がなされている。また、第二部全体では、人間の倫理が神への運動としてきわめて詳細に、そして広大な仕方で探求されており、これまで多くの社会学者にとって、貴重な知的源泉となっている。

神学と哲学の関係や、「聖なる教え」そのものの意味に関しては、可能であれば別の機会に論じていきたい。ともかく、『神学大全』は、「神」に関する第一部、「人間の神への運動」に関する第二部、そして、「神への道であるキリスト」に関する第三部から構成されている。

理性的被造物には天使も含まれるが、天使はただ一つのはたらきで究極に達することができることから、第二部での「理性的被造物の神への運動」は、「人間の神への運動」として捉えられる。トマスは、第二部の序言で、次のように言っている。

ダマスケヌスが言うように、“*imago*”によって、意思が自由で自体的な仕方で行為できるという、知性的なるものが表示されるかぎりにおいて、人間は神の“*imago*”へと造られたと言われる以上、「範型 (*exemplar*)」、すなわち「神」について、そして、神の「意志 (*voluntas*)」にしたがって、その「権力 (*potestas*)」から発出してきたものについて述べられた後に、かかる範型の“*imago*”，すなわち「人間」に関して考察することが、われわれに残されている。それは、「自由意思 (*liberum arbitrium*)」と「自らの行動の権力を持つ者」として、人間もまた「自らの行動の根源」であるかぎりにおいてである<sup>(3)</sup>。

先の引用では、『神学大全』の第二部は「理性的被造物の神への運動」が論じられることになっていた。しかるに、第二部冒頭のこの箇所では、“*imago*”である人間に関する考察として第二部全体を位置づけている。では、なぜ、「神への運動」が“*imago*”に関する考察となるのであろうか。

## I. “*imago*”としての“*dominus*”

『神学大全』で目指していることとは、神ご自身に関する認識だけではなく、「諸事物の、特に理性的被造物の根源であり、その究極であるかぎりの、神に関する認識を伝えること」である。したがって、神を範型とする“*imago*”として人間を考察することは、人間の根源であり究極である神に関する認識にかかわっている。すなわち、「人間の神への運動」は、「根源である神から出発して究極である神へといたる運動」であり、この運動にそくして、人間は“*imago*”

とされるのであるが、それは、「自由意思と自らの行動の権力を持つ者として、人間もまた自らの行動の根源であるかぎりにおいてである」。

人間は、自らの行動に関して何らかの権力を持ち、その根源であるかぎりにおいて、範型である神を“imago”として表現している。「人間の神への運動」とは、範型である神へと向かう“imago”の運動にほかならない。それは、「自らの行動の根源」としてなされる運動である。しかるに、トマスは、序言に続く第一問題第一項の主文で、次のように言っている。

人間によってなされる行為の中で、人間であるかぎりの人間に固有な行為だけが、本来的な意味で「人間的 (humanus)」と言われる。しかるに、人間がほかの非理性的被造物から異なっているのは、自らのはたらきの“dominus” (主) であるという点においてである。それゆえ、人間がその“dominus”であるところの行為が、本来、人間的と呼ばれる。さらに、人間は、理性と意志によって自らのはたらきの“dominus”であるから、自由意思はまた、意志と理性の機能であると言われている。それゆえ、本来的な意味で人間的と言われる行為は、考量された意志から発出する行為である。これに対して、何かほかの行為が人間に適合するならば、たしかに人間の行為と言われうるが、人間であるかぎりの人間の行為ではないので、本来、人間的行為ではない。ところで、ある能力から発出する行為はすべて、能力の対象が有する性格にそくして、その能力から原因されることは明らかである。しかるに、意志の対象は、「目的かつ善 (finis et bonum)」である。それゆえ、すべての人間的行為は目的のためであるものでなければならない<sup>(4)</sup>。

人間が自らのはたらきの“dominus”であるかぎり、人間のなす行為は「人間的行為」と呼ばれ、この人間的行為が倫理的考察の対象となる。したがって、人間を「自らのはたらきの“dominus”」として規定することは、『神学大全』第二部全体を貫きわめて重要な前提である。しかし、この“dominus”は、たんなる主権を意味するのではなく、あくまで“imago”の考察において捉えられなければならない。それは、「“imago”としての“dominus”」である。この点は非常に重要であると言えよう。

じっさい、“imago”との関連なしに“dominus”が解される場合、人間の主権の範囲はあいまいであり、自我の絶対性へと通じる危険性を孕んでいる。現在、われわれが直面している多くの問題は、この危険性に由来していると言っても過言ではなからう。

たしかに、われわれ人間は、各自がペルソナとしての人格的存在であり、自らのはたらきに関する主権を有している。人間の自由は、かかるペルソナとしての主権にもとづく。しかし、その自由は、「神への運動」のために人間へと与えられ、あるいは課せられているのである。

しかるに、すくなくともトマスにおいて、“dominus”はあくまで、「“imago”としての“dominus”」である。“imago”が範型である神との関係において成立しているように、“dominus”も主なる神との関係から成り立っている。人間は、「神への運動」において、“imago”としての“dominus”であり、「自らの行動の根源」なのである。

## Ⅱ. 範型である神

人間的行為とは、本来、「考量された意志から発出する行為」であるが、「ある能力から発出する行為はすべて、能力の対象が有する性格にそくして、その能力から原因されることは明らか」であり、そして、「意志の対象は、目的かつ善である」から、「すべての人間的行為は目的のためにあるものでなければならない」。したがって、人間的行為はすべて、「目的への運動」として成立している。

しかるに、この目的への運動は、究極目的への運動のもとに展開される。トマスは、『神学大全』第一部第八二問題第一項の主文で、次のように言っている。

「自然本性的な必然」は意志に背馳しない。かえってむしろ、知性が必然にもとづいて「第一基本命題 (prima principia)」に密着しているように、意志は必然にもとづいて「至福 (beatitudo)」である「究極目的 (ultimus finis)」に密着していなければならない<sup>(5)</sup>。

人間は自らの理性と意志によって、自らはたらきの“dominus”である。そして、「意志の対象は、目的かつ善である」が、さらに「意志は必然にもとづいて至福である究極目的に密着」している。したがって、究極目的が意志のはたらきの根源であり、意志が何かを欲求するということは、至福である究極目的への必然的な欲求にもとづいて、何らかの仕方です「善」であると捉えられるものを「目的」とすることから可能になる。そして、神は人間の根源であり、究極であるから、至福である究極目的とは、聖なる教えが意図するところの、「神に関する認識」にかかわっている。

すなわち、「人間の神への運動」とは、“imago”としての“dominus”である人間が、範型である神へと向かう運動である。しかるに、この運動は、至福を目指しており、それを究極目的とすることから成立している。したがって、範型である神こそが、この運動の終極であり、究極である。そして、この運動は、「神に関する認識」にもとづいて展開される。それゆえ、「聖なる教え」には、この人間の運動が必然的な仕方にかかわっている。

その一方、この運動においては、人間が不完全ながらも“dominus”であり、根源であるから、そこには完全性の違いが認められる。トマスは、『神学大全』第一部第九三問題第四項で、「神の“imago”はいかなる人間のうちにも見出されるか」を論じており、その主文で次のように言っている。

人間は、その知性的本性にそくして、「神の“imago”へと存している」と言われるのであるから、知性的本性が最高度に神を模倣することができるという、そのかぎりにしたがって、最高度に神の“imago”へと存している。しかるに、知性的本性が神を最高度に模倣するのは、神が自らを知性認識し、愛するということに関するかぎりにおいてである。それゆえ、神の“imago”は、三通りの仕方です、人間のうちに観られうる。一つには、「神を知性認識し愛するということへの自然本性的な適性 (aptitudo) を人間が有するかぎりにおいて」である。そして、かかる適性は、すべての人間に共通であるところの、「精神の自然本性 (natura

mentis)」そのもののうちに成立している。もう一つには、「人間が現実態 (actus) か能力態 (habitus) によって神を認識し愛するが、しかし不完全な仕方によるかぎりにおいて」である。これは「恩恵 (gratia)」の「同形性 (conformitas)」による“imago”である。第三には、「人間が神を現実態によって完全に認識し愛するかぎりにおいて」である。この場合、「栄光 (gloria)」の“similitudo” (類似性) にもとづく“imago”が認められる。(中略) それゆえ、第一の“imago”はすべての人間のうちに、第二の“imago”は「義人 (iustus)」のみに、これに対して第三の“imago”は、ただ「至福者 (beatus)」のうちに見出される<sup>6)</sup>。

「“imago”によって、意思が自由で自体的な仕方で行為できるという、知性的なるものが表示されるかぎりにおいて、人間は神の“imago”へと造られたと言われる」以上、人間はその知性的本性にそくして“imago”である。しかるに、「神が自らを知性認識し、愛する」ということが神における根源的なはたらきであるから、人間が“imago”であるということも、かかる根源的なはたらきにもとづいて区別される。

すなわち、範型である神へと向かう運動は、神への認識と愛にそくして成立している。そして、かかる認識と愛がどれだけ完全であるかに応じて、“imago”の意味そのものが異なってくる。「神を知性認識し愛するということへの自然本性的な適性を人間が有するかぎりにおいて」はすべての人間のうちに、「人間が現実態か能力態によって神を認識し愛するが、しかし不完全な仕方によるかぎりにおいて」は義人のうちに、そして、「人間が神を現実態によって完全に認識し愛するかぎりにおいて」はただ至福者のうちに、それぞれ“imago”が見出されることになる。この区別は、範型へと向かう“imago”の運動そのものの「究極」を意味していると考えられよう。

### Ⅲ. 範型への運動

“imago”とは範型である何かを表現している。しかるに、人間が神を範型とする“imago”であるということは、範型である神への認識と愛というはたらきにもとづいている。かかるはたらきが、人間における“imago”の表現にほかならない。

しかるに、すべての人間は、その精神の自然本性のうちに、神への認識と愛に対する自然本性的な適性を有している。すなわち、自然本性的な仕方、範型である神への認識と愛へと開かれた存在なのである。しかし、この段階での認識と愛は、可能的な段階にとどまっておき、そこには不完全な“imago”の表現が認められるにすぎない。

これに対して、「現実態か能力態によって神を認識し愛するが、しかし不完全な仕方による」場合は、「恩恵の同形性による“imago”」が人間のうちに見出される。恩恵を受けるか否かは、人間の自然本性を超えている。そのかぎりにおいて、範型である神への運動がより完全なものとなるためには、超自然本性的な要素が不可欠となる。

さらに、「人間が神を現実態によって完全に認識し愛する」場合は、もっとも完全な“imago”である「栄光の“similitudo”にもとづく“imago”」が人間のうちに認められる。この段階が、“imago”の表現の究極であり、神への運動は、この究極を目指して展開される。

したがって、この運動は、人間の自然本性において展開されるどころの、超自然本性的な完成への運動ということになる。神を範型する“imago”であるという点に、超自然本性への可能性が認められる。じっさい、トマスは、『神学大全』第一部第九三問題第八項で、「神なる三位性の“imago”が魂のうちに存するのは、ただ神という対象への関係づけによってのみであるか」を論じており、その主文で次のように言っている。

対象の相異が、言葉と愛の「種 (species)」を異ならしめることは明らかである。じっさい、人間の「心 (cor)」において、「石」について懐抱された言葉と「馬」についてのそれとは種において同じではなく、また、それらへの愛も種において同じではない。それゆえ、神の“imago”は、神の知に関して懐抱された言葉と、そこから派出される愛にそくして、人間のうちに認められる。このように、神の“imago”は、魂において、神へと赴くか、赴くよう生まれついているかぎりにおいて認められるのである<sup>(7)</sup>。

人間は神への認識と愛にそくして、神の“imago”である。すなわち、神を対象とした認識と愛である。しかるに、三位一体という観点から“imago”を捉えようとする場合、言葉の発出と愛の発出がその根源的なはたらきとなる。この点、トマスは『神学大全』第一部第九三問題第七項主文で、「第一にそして根源的な仕方、三位一体の“imago”は、精神のうちに、はたらきにそくして認められる。それはすなわち、われわれが、その有する知から思考することによって内なる言葉を形成し、またここから愛へとほとぼしり出るといふ、はたらきにそくしてである」と言っている<sup>(8)</sup>。

人間が三位一体の“imago”とされる場合、神における「言葉の発出と愛の発出」を最高度に模倣しなければならない。そのため、「神の“imago”は、神の知に関して懐抱された言葉と、そこから派出される愛にそくして、人間のうちに認められる」ことになる。範型である神へと向かう“imago”の運動は、超自然本性的な仕方、完成へと導かれるとしても、この運動そのものは人間にとって自然本性的なものであり、「神の“imago”は、魂において、神へと赴くか、赴くよう生まれついているかぎりにおいて認められる」わけである。

### 結び “imago” の表現

“imago”とは、本来、そこにおいて範型となる何かが表現されている事物である。人間は、神を認識し愛するというはたらきによって、神を“imago”として表現しており、「その有する知から思考することによって内なる言葉を形成し、またここから愛へとほとぼしり出るといふ、はたらきにそくして」、三位一体を“imago”として表現している。

このことは、かかるはたらきをより現実的な仕方で行っている義人や至福者のうちに、あるいはその生き方を通じて、神が“imago”として表現されているという可能性を示している。しかし、“imago”の表現をこのように限定することは、本来的ではないようにも思われる。

じっさい、神は、人間だけではなく存在するすべてのものの根源であり、究極である。そのかぎりにおいて、万物は神を何らかの仕方、表現していることになる。トマスは、「被造物の

うちに必然的な仕方では三位一体の痕跡 (vestigium) が見出されるか」を論じている『神学大全』第一部第四五問題第七項主文で、次のように言っている。

「結果」はすべて、何らかの仕方での「原因」を表現しているが、しかし、それはさまざまな仕方による。すなわち、ある結果は、煙が火を表現するように、原因の「形相 (forma)」ではなく、その「原因性 (causalitas)」のみを表現している。そして、このような表現は「痕跡の表現」と言われる。じっさい、痕跡は、何か通り過ぎたものの運動を証示するが、しかしそれがいかなるものかを証示するものではない。これに対して、ある結果は、生まれた火が生む火を表現し、メルクリウスの彫像がメルクリウスを表現するように、原因を、その形相の“similitudo”に関するかぎりにおいて表現している。そして、これが「“imago”の表現」である<sup>(9)</sup>。

“imago”の表現とは、範型という原因に対する結果としての表現であるが、痕跡の表現と区別されるのは、たんなる原因性ではなく、「原因を、その形相の類似性に関するかぎりにおいて表現」している点である。

したがって、神に対する“imago”の表現とは、神への認識と愛を通じて、何らかの仕方での「形相の“similitudo”」にまでおよんでいることになる。この点においても、超自然本性的な表現を自然本性的な仕方では有しているという、人間の逆説的な性格が認められよう。

その一方、この個所はまた別の可能性を示しているように思われる。たしかに“imago”の表現は知性を有する者のみに認められる。しかし、痕跡の表現は、およそ存在するすべてのものに見出される。すなわち、万物は神を痕跡として表現しているのである。

人間中心主義は、ただ“imago”としての“dominus”という点でのみ、本来の意味を有している。すべての存在は神を何らかの仕方では表現している。しかし、理性的被造物である人間は、その精神にそくして、神への認識と愛というはたらきにもとづいて、“imago”として表現している。そして、この表現が“dominus”としての主権を可能にするわけである。

これに対して、痕跡の表現は、神学的な視野を大きく広げる要因となるであろう。それはけっして汎神論にいたる道ではない。被造物はその存在のすべてを神に依存しているとしても、神は被造物から無限に超越している。むしろ、痕跡の表現は神学の普遍的な解釈へと通じる道ではないだろうか。

たしかに、人間は“imago”と“dominus”という点で、特別な存在として位置づけられる。しかし、この特別な性格は、あくまで「神への運動」における特殊性であって、そこから、いわゆる「人間中心主義」や「キリスト教至上主義」が帰結されるわけではない。神学が啓示にもとづく救済に関する学であるとしても、その救いは個人的なものではありえない。すべての存在へと開かれた「聖なる教え」こそ、本来の意味での「神学」ではないだろうか。神学が「学」であるということも、その普遍性において捉えられなければならないのである。

略号

S.T. Thomas Aquinas, *Summa Theologiae* (『神学大全』), ed. Paulinae, Torino, 1988.

註

- (1) 本稿は、「共同体と連帯性－トマス・アクィナスにおけるペルソナと共同善－」という博士論文における、第二部「“imago”としてのペルソナ」の第一章「“imago”の表現」に対応する予定の部分である。この博士論文では、ペルソナに関する分析を通じて、連帯性という観点からトマスの人間論と共同体論の神学的解釈をめざしている。筆者は、永合位行神戸大学教授を研究代表者とする共同研究の研究分担者として、科学研究費補助金（基盤研究（C）21530181：平成二一年度～二四年度）の交付を受け、「多元的秩序構想における経済学統合化の試み－中間組織の経済倫理学に向けて－」という研究課題にも取り組んでいる。この共同研究は経済学の分野におけるものではあるが、今回の博士論文に関して、筆者はそこから、「連帯性」という具体的な展望を有することができた。
- (2) S.T.I,q.2, intro. Quia igitur principalis intentio huius sacrae doctrinae est Dei cognitionem tradere, et non solum secundum quod in se est, sed etiam secundum quod est principium rerum et finis earum, et specialiter rationalis creaturae, ut ex dictis est manifestum (q.1,a.7) ; ad huius doctrinae expositionem intendentes, primo tractabimus de Deo; secundo, de motu rationalis creaturae in Deum; tertio, de Christo, qui, secundum quod homo, via est nobis tendendi in Deum.
- (3) S.T.I-II,prologus. Quia, sicut Damascenus dicit, homo factus ad imaginem Dei dicitur, secundum quod per imaginem significatur intellectualem et arbitrio liberum et per se potestativum; postquam praedictum est de exemplari, scilicet de Deo, et de his quae processerunt ex divina potestate secundum eius voluntatem; restat ut consideremus de eius imagine, idest de homine, secundum quod et ipse est suorum operum principium, quasi liberum arbitrium habens et suorum operum potestatem.
- (4) S.T.I-II,q.1,a.1,c. actionum quae ab homine aguntur, illae solae proprie dicuntur humanae, quae sunt propriae hominis in quantum est homo. Differt autem homo ab aliis irrationalibus creaturis in hoc, quod est suorum actuum dominus. Unde illae solae actiones vocantur proprie humanae, quarum homo est dominus. Est autem homo dominus suorum actuum per rationem et voluntatem: unde et liberum arbitrium esse dicitur facultas voluntatis et rationis. Illae ergo actiones proprie humanae dicuntur, quae ex voluntate deliberata procedunt. Si quae autem aliae actiones homini convenient, possunt dici quidem hominis actiones; sed non proprie humanae, cum non sint hominis in quantum est homo. Manifestum est autem quod omnes actiones quae procedunt ab aliqua potentia, causantur ab ea secundum rationem sui obiecti. Obiectum autem

voluntatis est finis et bonum. Unde oportet quod omnes actiones humanae propter finem sint.

- (5) *S.T.I,q.82,a.1,c.* Similiter etiam nec necessitas naturalis repugnat voluntati. Quinimmo necesse est quod, sicut intellectus ex necessitate inhaeret primis principiis, ita voluntas ex necessitate inhaereat ultimo fini, qui est beatitudo.
- (6) *S.T.I,q.93,a.4,c.* cum homo secundum intellectualem naturam ad imaginem Dei esse dicatur, secundum hoc est maxime ad imaginem Dei, secundum quod intellectualis natura Deum maxime imitari potest. Imitatur autem intellectualis natura maxime Deum quantum ad hoc, quod Deus seipsum intelligit et amat. Unde imago Dei tripliciter potest considerari in homine. Uno quidem modo, secundum quod homo habet aptitudinem naturalem ad intelligendum et amandum Deum: et haec aptitudo consistit in ipsa natura mentis, quae est communis omnibus hominibus. Alio modo, secundum quod homo actu vel habitu Deum cognoscit et amat, sed tamen imperfecte: et haec est imago per conformitatem gratiae. Tertio modo, secundum quod homo Deum actu cognoscit et amat perfecte: et sic attenditur imago secundum similitudinem gloriae. Unde super illud *Psalmi.4,[7]*, Signatum est super nos lumen vultus tui, Domine, Glossa distinguit triplicem imaginem: scilicet creationis, recreationis et similitudinis. – Prima ergo imago invenitur in omnibus hominibus; secunda in iustis tantum; tertia vero solum in beatis.
- (7) *S.T.I,q.93,a.8,c.* Manifestum est autem quod diversitas obiectorum diversificat speciem verbi et amoris: non enim idem est specie in corde hominis verbum conceptum de lapide et de equo, nec idem specie amor. Attenditur igitur divina imago in homine secundum verbum conceptum de Dei notitia, et amorem exinde derivatum. Et sic imago Dei attenditur in anima secundum quod fertur, vel nata est ferri in Deum.
- (8) *S.T.I,q.93,a.7,c.* Et ideo primo et principaliter attenditur imago Trinitatis in mente secundum actus, prout scilicet ex notitia quam habemus, cogitando interius verbum formamus, et ex hoc in amorem prorumpimus.
- (9) *S.T.I,q.45,a.7,c.* omnis effectus aliquo modo repraesentat suam causam, sed diversimode. Nam aliquis effectus repraesentat solam causalitatem causae, non autem formam eius, sicut fumes repraesentat ignem: et talis repraesentatio dicitur esse repraesentatio vestigii; vestigium enim demonstrat motum alicuius transeuntis, sed non qualis sit. Aliquis autem effectus repraesentat causam quantum ad similitudinem formae eius, sicut ignis generatus ignem generantem, et statua Mercurii Mercurium: et haec est repraesentatio imaginis.

本稿は、平成24年度科学研究費補助金（基盤研究（C）：21530181）による、研究成果の一部である。

